

続 備南中世山城跡の現状

福山ユースドマップクラブ

(収録山城跡) 西山城、滝山城、竜王石山城、山王山城、要害山城、山戸山城、中野天神山城

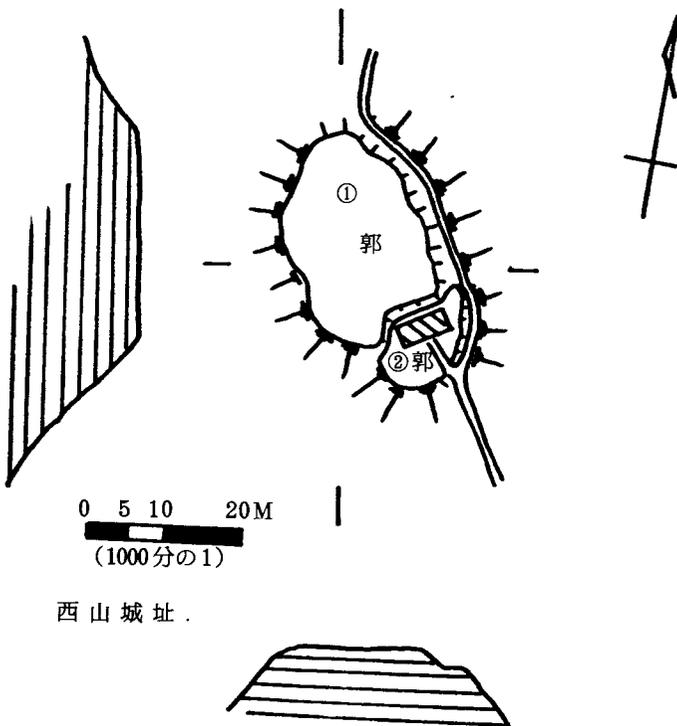
(調査参加者) 田口義之、岡内謙二、七森博明、関戸和典、松本信二、猪原進、柏原正尚

西山城跡 (別名 池原城 神原城)

所在地 福山市坪生町西池平

現状 坪生町、春日町と深安郡神辺町の境界上の標高一八〇m余の山頂から南東に延びた尾根上に築かれた山城で現在城址南端に稻荷神社が祭られている。

遺構は二七m×一八mの削平地(①郭)とその南の一〇m×一〇mの削平地(②郭)を残すのみで空堀、土累等は全くと残っていない。猶、②郭は前述の神社の敷地になっている。



西山城址

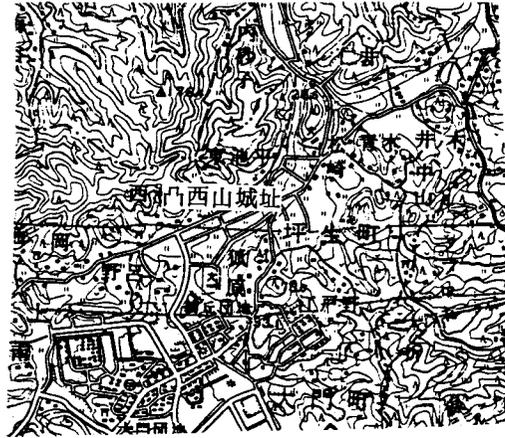
城主 「西備名区」によると、大内氏の家臣、神原伯耆守助宗、同采女正助春、同和泉守、同四郎頼景等、神原氏が代々居城し頼景の代享禄年中（一五二八〜一五三一）に没落したという。この神原氏の性格は不明であるが、おそらく、

この附近の中世庄園坪生荘の名主層で室町期に買得等の方法で田地を集積して力をたくわえ、戦国期にこの附近に勢力を伸ばしてきた周防（山口県）の守護大名大内氏の被官となつて武士化した者であろう。

滝山城跡（別名 三郡山城）

所在地 深安郡神辺町上御領

現状 猪原薫一氏の『滝山城跡に就いて』（備後史談所収）によれば、明治の末頃迄は明らかに城跡としての遺構が見られたが、その後石材採取のため地形が変わつたとのことで、私達が昭和四五年踏査した時点でも遺構として明確に認められるものは、山頂北側に残る二〇m×一〇mの削平地のみで、山頂部はなだらかな畑地となつていた。



西山城址附近



滝山城址附近

城主 「備後古城記」によれば城主、宍戸孫六郎秀安、「西備名区」には官氏の居城としている。

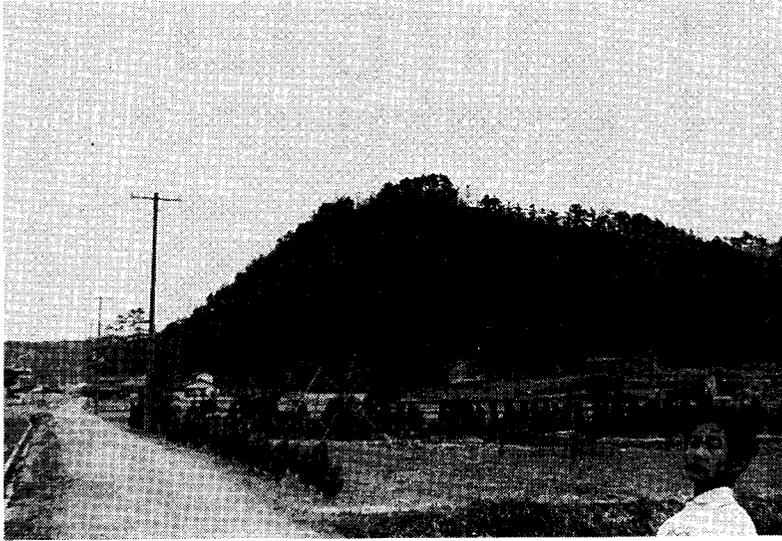
宍戸氏は安芸国甲立に本拠を置いた有力豪族であるが、その系図中に秀安の名は見あたらない。又、宍戸氏がこの地に勢力を伸ばしたことを伝える記録も残っていない。しいて関係づけければ天正（一五七三〜一五九一）末年、宍戸氏は毛利氏重臣として備中に一〇二五八石、備後に一一一六石の給地を有している（毛利氏八ヶ国時代分限帳）ので、その所領が備後、備中の境にある当城附近にあつて、その支配のため一族の秀安をこの城に置いたものであろう。

一方官氏が居城したと伝えるのは、室町時代の永享三年（一四三一）、官上野入道は当時安那東条と呼ばれた御領の領有をめぐつて岡崎門跡と

争っている（御前落居記録）ことから推定して、御領に勢力を有する宮氏がその所領支配の拠点としてこの城を使用したものであろう。

以上をまとめれば、当城の始築年代、築城者等は不明であるが室町期には備後の有力豪族宮氏が所領支配のために当城を利用し、宮氏が亡んだ後天正年間には同じ理由で安芸国の穴戸氏がこの城を利用したのであろう。

ひろん山城は戦いの為に築かれたものであるから滝山城も何度か戦のちまたにまき込まれたであらう。
しかし、残念ながら記録は何も語ってくれない。



御領滝山城址

竜王石山城跡

所在地 深安郡神辺町御領

現状 神辺町御領の北にそびえる八丈岩山塊から南に延びる尾根を利用した山城で、現在遺構としては四二m×一〇mの長方形の削平地（①郭）と、その南に接する一〇m×一〇mの削平地（②郭）が存在し、①郭北側尾根続きには巾約一〇mの空堀状の窪地が残っている。

城主 重政氏の居城と伝える。重政氏の家伝では、その年代は元弘年中（一一三三—一一三三）で平左衛門尉光泰が後醍醐天皇方として挙兵した時、この城に拠ったという。この伝えは他に正確な記録がなく何ともいえないが、あるいはこの城のある御領はその名の通り皇室を本家とする庄園であった可能性があり、重政氏をその庄官と仮定すれば、元弘の変に際して、重政氏が官方に応じてこの城に籠ったということとは十分考えられる。

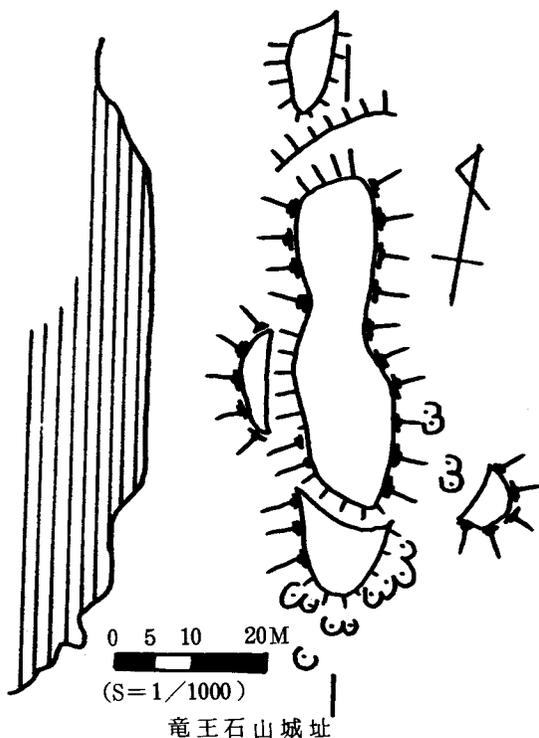
なお、御領の城主として「西備名区」等には目崎氏や神辺城主山名理興の家臣、菊地肥前守、同右近允、安田文次の名前をあげているがその城跡は現在判明していないので、彼等が重政氏のことであると



竜王石山城址附近

城に居城した可能性もある。その場合、当城は神辺城の支城としての役割を持っていたものと思われる。(備陽六郡志によればこの城は別名茶白山城という。この説によれば菊地氏等もこの城に居城したことになる)

(注) 西備名区によれば菊地肥前守等は茶白山城主という。



山王山城跡

所在地 深安郡神辺町湯野

現状 五ヶ手山々塊の東側の主峰、標高八二mの山王山々頂に築かれた山城で、現在山頂平地に日吉山王神社が祭られている。城の遺構は先述

の神社の敷地となっているため明確なものは何も残っていない。

山頂平地の西側に土塁らしき土盛りがあるだけである。

城主 「西備名区」等によると、天文年中(一五三二〜一五五四)に宮次郎左衛門が居城し、神辺城主杉原(山名とも)氏と戦い、敗れて討死にしたという。宮氏の本拠は天文三年(一五三四)の亀寿山合戦に敗れ



山王山城址土塁？

てのちは中条（神辺町）附近に移ったようであるから、その出城として山王山の神社を利用したのではないだろうか。

その場合、南方の神辺城に拠って、備南支配の基礎を固めつつあった山名（杉原）理興の勢力と衝突し、官氏が敗れたのであろう。

・調査年月日

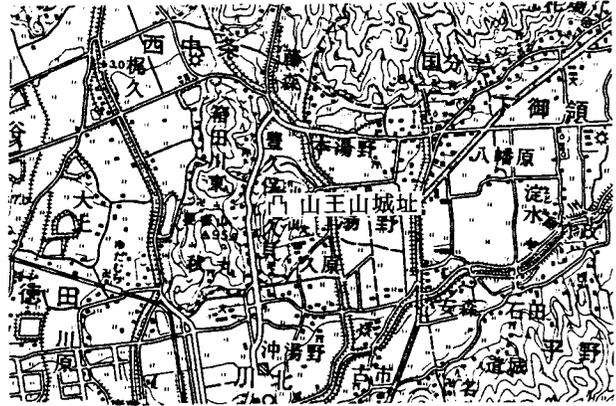
一九七一、三、一四

要害山城跡（別名 天神山城、茶臼山城）

所在地 深安郡神辺町徳田

現状 五ヶ手山々麓の西方の主峰、標高九五・九mの要害山々頂に残る山城跡で、山頂にある主郭は長径四三m、短径四〇mのほぼ円形の平地である。

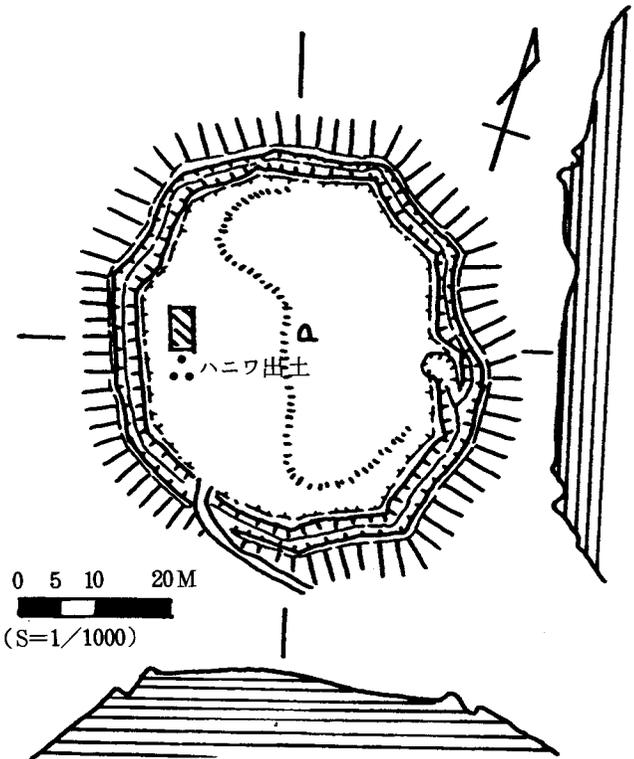
『福山市史』上巻（P四一四）によると、この城は径四〇mの大円墳の墳頂部を切り取り、古墳の周壕を利用して築かれたものとされている。確かに主郭西部に建つ石槌神社の社殿の下からはハニワの破片が出土す



山王山城址附近



要害山城址附近



要害山城址

るが、そのみを以って大円墳を利用した山城とすることはできないであろう。たまたま城の主郭を築く時、その内にあった小円墳を破戒したということも考えられるからだ。特に主郭の平地は水平ではなく西側がやや高まっていて、ハニワが出土する（前頁図）、この高まりを古墳跡と考えた方が良いのではなからうか。

この城跡で特筆すべきことは、土塁と空堀の遺構がほぼ完全に残り、主郭東端には城門跡と思われるものが存在することである。土塁の高さは二・五m、空堀の中は底部一・六m、上部三・七mを計り、城門跡は土塁がくい違いになっていて、その間が窪地になっている。おそらく近世城郭の升形門の原初的なものがここにあったのであろう。尚、主郭の他にも南麓にかけて郭跡と思われる数段の削平地が残っている。

城主 『西備名区』等によると始め官若狭守が居城し、後、山名清左衛門、平賀隆宗が居城したという。官若狭守は備南官氏の惣領で初め亀寿山城（新市町）に居城し、亀寿山合戦に敗れて後安那郡内に移城したと伝える（西備名区）のでこの城に直接居城したとは思われない。

『備後国福山御領分古城記』によれば官若狭守はこの城に城代として山名清左衛門を置いたという、おそらく安那郡北部に勢力を持つ官氏が南方神辺城の山名氏に対する押えとしてこの城を築いたのであろう。

山王山城の項でも述べたように天文年間、官氏は山名氏と戦って敗れたという伝えがあるところを見ると、この城もあるいは官・山名合戦の舞台になったのかも知れない。

平賀隆宗は安芸国高屋の有力豪族で天文一六〇一八年にかけて大内軍

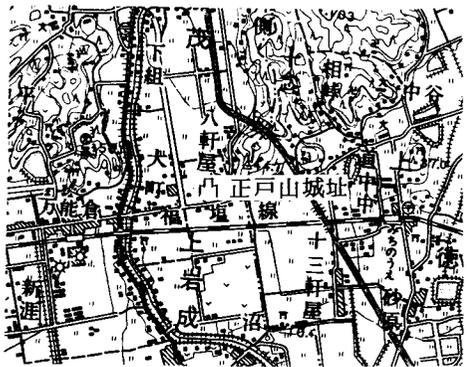
の神辺城攻撃の一翼となって秋丸に本陣を置いたという（陰徳太平記）。秋丸は要害山南麓の地名であるから、この時、要害山城にも平賀氏の軍勢が籠ったのであろう。

以上をまとめれば、この城は初め官氏が南方に対する押えとして築き、その後、神辺城合戦の際、寄手の平賀氏によって利用されたものと思われる。

しょうと
正戸山城跡（勝戸、勝渡とも書く）

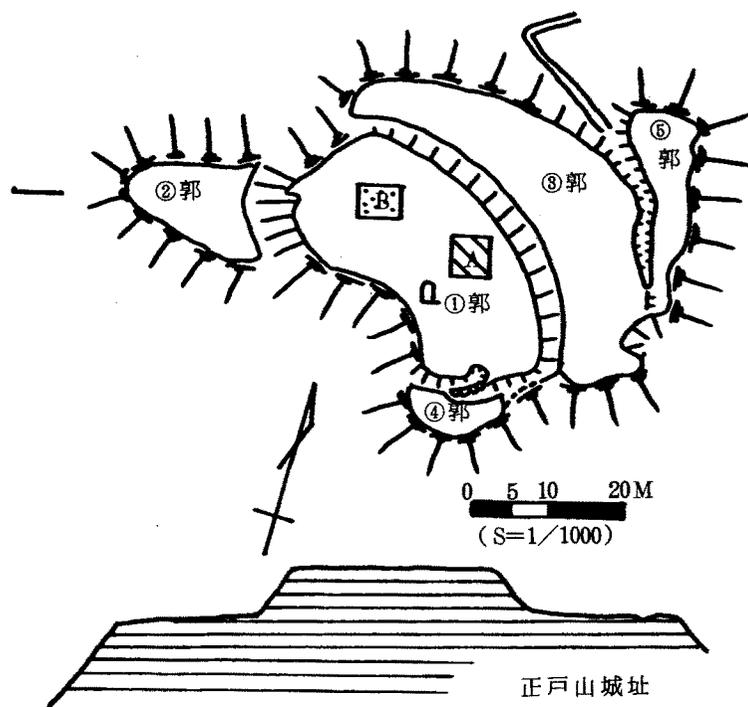
所在地 福山市御幸町上岩成正戸

現状 神辺平野の中央北部に孤立する標高四〇m余の小丘、正戸山を利用した山城で、現在、山頂平地には石槌神社（A）が祭られ、その西方には気象観測器具（B）が置かれている。城の遺構は山頂の四〇m×一五mの長方形の削平地（①郭）を中心に、その西に一七×一二mの削平地（②郭）、北から東にかけて長さ五六m×巾五〜一〇mの細長い削平地（③郭）、南に一三×四mの削平地（④郭）、③郭から東に空堀を隔てて一八



正戸山城附近

×五(八m)の削平地(⑥郭)の五つの郭跡が残り、①郭南端には虎口状の遺構と石塁が存在する。又、北麓には現在、水田になっている広大な平坦地があり城に附属した屋敷跡と思われる。尚、『西備名区』によるとこの城の西、北、東はかつて沼であったといわれ、山城ではあるが、備中高松城や福山市津之郷町の小森城等と同様、沼城の性格も持っているものと思われる。



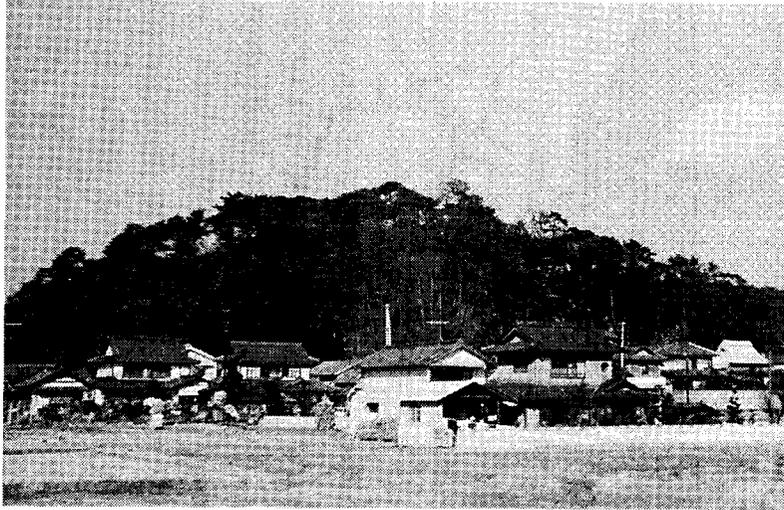
城主 『備陽六郡志』等によると、この城は小藤美作守が築き、ために(しょうとう)↓正戸山城と呼ばれるようになったとも、官三郎入道正渡が居城したため正渡山(しょうとやま)城と呼ばれるようになったとも伝えるがその年代等はさだかでない。

この城が史上に現われるのは南北朝内乱期と戦国期の二度である。南北朝時代の観応二年(一三五一)一〇月、足利尊氏方の備後守護岩松頼宥はこの城に籠り、敵対する上杉氏や宮盛重の攻撃を受けている。

この時は三吉覚弁等の奮闘によって敵を撃退しているが、頼宥がこの城に本拠を置いたのは、おそらく、この城が神辺平野という経済地盤を持ち、かつ眼下に山陽道が通るといふ、交通の要衝でもあるという点に目をつけたからであろう。

戦国期に入るとこの城には官氏の一族が居城したようで、天文年間の城主として尼子方の宮入道正味の名が伝わる。『関閩録』三卷P二五三「天文一六年六月二日付大内氏年寄衆連署状」によると天文一六年(一五四七)四月、大内氏の軍勢がこの城を攻撃している。この時期は、尼子方の神辺城に対して大内勢が総攻撃をしかけた時にあたり、落城したという記録がないところを見ると、この攻撃は尼子方の官氏に対するけん制的な意味あいを持つものであったのであろう。

その後『西備名区』等によると天文二十二年(一五五二)七月の志川滝山台戦の際、この城も毛利勢に攻められ、正味もよく戦ったが「(毛利勢)の一手は東北の山へ取り上り、少し小高き所より火矢を射かけて攻けるに」といふぐあいに火攻めによって落城し、正味も討死にしたという。



御幸町の正戸山城址

なかのてんじん
中野天神山城跡

所在地 福山市加茂町中野

現状 加茂谷の北を画する標高一八〇mの天神山々頂に残る山城跡で、現在中国自然遊歩道のルートとなり休息所が設けられている。

城の遺構は山頂の三二m×一六mの削平地(①郭)とそれに附属する二ヶの削平地(②③郭)のみで、①郭には巨岩が四ヶ露出している。

(一九七二・一一・一九調査 田口・柏原・七森・関戸)

城主 『西備名区』によると周防大内家の家臣、内藤伊賀守久安、同伊賀守宗久が明応年中(一四九二〜一五〇〇)から慶長五年(一六〇〇)

迄居城したという。

しかし、明応年中大内氏の勢力がこの方面に及んだという証拠はない。

『備後国福山御領分古城記』によれば、この城には宮氏の城代、栗木兵部近氏や内藤伊賀守、吉田氏の家臣岡本氏等が居城し



天神山城附近

たという。この附近は戦国期まで宮氏が勢力を持っていた地域であるから、おそらく、初め宮氏の代官が居城し、天文二十一年（一五五二）の宮氏滅亡後、大内氏の家臣、内藤伊賀守などがこの城に拠ったのであろう。

（文責 田口義之）

